安心して子育てができるまちづくり

平成15年に次世代育成支援対策推進法が制定され、子育て支援を社会的な課題として取り組んでいく法的な整備が行われました。彦根市では、（仮称）彦根市次世代育成支援行動計画を3月に策定する予定です。

子育てに対して不安を抱く親が増え、子どもへの虐待が増加するなど、子育てを取り巻く問題は、今や大都会だけのものではありません。子育てをする親が、安心して、楽しく子育てをするために、今どんな支援が必要でしょうか。

さまざまな立場から子育て支援にかかわる人に、子育ての現状と、これからの子育てについて、話していただきました。

▶ポケット広場のようす（子育て支援センターふたば保育園内で）

出席者（順不同）

紀伊規子さん（大藪町）
げんげんキッズ編集委員

杉原祥浩さん（高宮町）
彦根市剣道連盟指導者
彦根市剣道スポーツ少年団指導者

田島麻佐子さん（西沼波町）
NPO法人
保育サービスドリーム代表

中村信子さん（野田山町）
旭森子育て支援グループ代表

渡辺宏子さん（中藪一丁目）
彦根乳児保育所所長

中島　一
彦根市長

核家族世代の子育て

市長　新年あけましておめでとうございます。さて、わが国では、子どもの数が減り続け、社会保障制度の破綻や労働力不足など、これからの社会に深刻な影響を与えると危惧されています。彦根市では、平成16年度に次世代育成支援を重点施策として位置付け、次世代育成支援体制の整備を始めています。

今回は、日ごろ子育て支援に取り組んでいる皆さんに集まっていただき、現在の子育てと、それを取り巻く環境について、現状や問題点などをお話しいただき、子育て中の親子に対してどういった支援が必要か、行政として、地域として、家庭としてできることは何かをお聞きしたいと思います。

渡辺　私が勤務する乳児保育所には0歳～4歳のお子さんが毎日元気に通ってこられます。保護者の皆さんを見ていて感じることは、その多くが、仕事を持ちながら子育てを本当に一生懸命にしておられるということです。「あんまり頑張りすぎないで、のんびりと・・・。」とアドバイスすることもありますが、非常にきちょうめんというか、神経質になっておられる人が多いように感じます。

田島麻佐子さん

田島　「保育サービス」講習会受講者がNPO法人「保育サービスドリーム」を結成し、保育サービス事業を実施しています。初めて親になった人の中には、仕事の都合で転勤してきた人も多いようです。こういった親にとっては、相談できる相手もいない環境にあるのではないでしょうか。いわゆる核家族でずっと家にいて、子どもだけと過ごし、良くも悪くも子育てだけに没頭している父親や母親は、自分も社会の一員であって地域の一員であるという感覚とか、他の人と話したり出会ったりすることで生まれてくるゆとりもなくしているように思います。

中村　私たち「旭森子育て支援グループ」は、旭森地区公民館で、幼稚園や保育所に入る前の子どもさんとその保護者を対象に「のびのび教室」を開催しています。参加者は、初めて子育てをする「お母さん1年生」の人が多いですね。また、新興住宅地に引っ越して来られて、近所に友達が少ないことも最近の特徴です。ですから、同じ子育てをするお母さんや、先輩のお母さんたちと交流する子育て支援教室も必要なんです。子どもが1歳になったら母親だって1年生、2歳になったらやっと母親も2年生なんです。

なくなった親子の時間

市長　現在では、社会の仕組みも変わり、家庭と地域との関係が疎遠になっているようです。家庭における親と子どもの関係というのはどのようになっているのでしょうか。

杉原　子どもたちに剣道を教えるようになって20年になりますが、最近は子どもに「早くしなさい。」と言う親が多いようです。父親は仕事で忙しく、母親も仕事を持っている人が多いので、子育てが少し落ち着くと仕事に戻らなければなりません。子育てに手を抜いているわけではないでしょうが、特に父親は子どもと遊ぶ時間が昔に比べて大きく減っているように思います。

紀伊　子どもの地域での活動と、家庭の子育てを支援することを目的に発行してきたこども情報誌「げんげんキッズ」も、2001年の発行から4年が経ちました。子どもにとって、父親に言われるのと、母親に言われるのとでは何かが違うのです。でも仕事が忙しいなど、多くの家庭で、父親が子どもと接する時間が不足しています。このため、育児をする母親の負担やストレスを少しでも軽減できる、子育て支援教室や、スポーツ少年団などの役割が大きくなっているのだと感じます。

紀伊規子さん

渡辺　昔と違って、今は保育所への送迎も大半が自動車です。あかちゃんの場合、クーハン（かごのような物）に入れて連れてこられる人がいます。せめて駐車場からお母さん、お父さんが抱っこしてきてくださいとお願いしています。おんぶやだっこで親ごさんにしがみついて、子どもも親もお互いの温もりを感じることが大切なのです。

また、保育所や幼稚園へ送るときに子どもが泣くと、親は保育所は嫌なのだろうと思ってしまいますが、これはかならずしもそうではないと思います。親ごさんと離れるのが嫌で子どもが泣くのは当然なのです。それだけ親子関係がしっかりと出来ている証拠なのです。

子育てが負担になったのは社会のせい？

市長　テレビやラジオ、新聞などで、児童虐待の話題を目にする機会が増えました。本当に痛ましく、そんなことはあってはならないことです。そこでこういった事件が起こる原因も含めて、現代の子育て世代を取り巻く社会状況の何が問題なのかについて皆さんのお考えをお聞かせください。

中村　現在は、心と心を通わせて育てるという余裕が本当にないように思うのです。最近では、多くの家庭が両親とも働きに出ておられます。子どもが小さくて今は家におられるお母さんのなかにも、ゆくゆくは子どもを保育所に入れてお勤めに出る人がいます。子育て支援に携わる者としては、お父さん

新春座談会

座談会会場の「市立ふたば保育園」は、市内で初めて高齢者福祉施設が併設された保育所として平成15年に完成しました。園内には、地域子育て支援室があり、乳幼児とその保護者を対象にポケット広場などの取り組みが行われています。

中村信子さん

やお母さんに、もっと子どもと過ごしてくださいと言いたいところです。しかし、社会全体がそういう状況にあるのでしょうか。結果として、乳幼児期に親とじゅうぶんな時間を過ごせていない子どもが少なくありません。

田島　よく、「社会が悪い」という言葉を耳にします。しかし、社会環境だけに問題があるとは言えないと思います。児童虐待の問題なども、テレビや新聞を見ている限りでは、親が地域とのかかわりをあまり持っていない家庭に多いように感じます。子育てや、仕事から来るストレスを、例えば友人のように、話せる人が身近にいれば癒されることもあると思います。もちろんそれは家族であることが一番ですが、それ以外にも、親がかかわりを持てる場所があることも大切なことだと思います。

紀伊　人の考え方も、昔とは変わり、地域のつながりが重視された生活から、個人のプライバシーを重視する社会になりました。かつては少なくとも近所の子どもの顔は誰もが知っていたはずですが、現在はそうではなく、特にマンションやアパートなどでは、隣に住む人の顔も知らないことも珍しいことではありません。むしろ、プライバシーを気づかう余り、地域に出てこられない人に声をかけることもためらうくらいなのです。

杉原　私も含めて、最近は親になりきれないままで親になってしまった人も多いのではないでしょうか。昔もそうだったのかもしれませんが、昔は同居している祖父母や、地域の力を借りて、親自身も成長できたのです。ところが、核家族が当たり前である現在は、おじいちゃんやおばあちゃんが同居していない家庭が多く、地域とのつながりも弱くなり、分からないことがあったり、間違った子育てをしていても、そのことを教えてくれたり、アドバイスしてくれる人がいないのです。

子育てを支援する喜び

市長　確かに、世の中が悪いという言葉だけで済ますことには非常に問題があると思います。家庭や地域の子育て力が低下した今こそ、家庭や地域社会の中で真剣に子育てを考えていかなければならないと思います。そこで皆さんが取り組んでおられる子育て支援などの活動のうち、成功したと思われる事例がありましたらお聞かせ願いたいと思います。

中島一　彦根市長

渡辺　彦根乳児保育所では、地域の皆さんや、民生児童委員さんを交えて、子育てをテーマに出前講座をしています。参加された人が園に来てくださるのがうれしいですね。

中村　平成8年度に子育て支援教室を始めたときは、こちらがすべて準備して、参加者はお客様でした。しかし、参加するみんなで楽しい教室をつくりましょうと呼びかけたところ、お母さんたちはだんだんと自主的に活動されるようになって、私は裏方にまわることが多くなりました。そして今では、以前は利用者であったお母さんたちが、「のびのび教室」「すくすく教室」のスタッフとして、お手伝いをしてくれるようになりました。自分の子育ての経験を、地域で次に子育てをする人に伝えられることそが、私が目標にしていた新しい地域の子育てなんです。

杉原祥浩（よしひろ）さん

杉原　私が剣道を教えた子どもたちが、指導者として帰ってきてくれるようになりました。それはもう感無量です。皆さんも同じだと思いますが、自分がやってきたことを誰かが受け継いでくれるということは、それに対する自分の思いも広がってくことだと思います。ですから、教え子が指導者になってくれることは、最高の成功例ではないかと思うのです。子育ても、そうでありたいものです。

田島　託児サービスや、親子で活動する行事のほかに、託児を利用していただき、お母さんどうしが交流する場も作っています。子どもと少しの時間を離れることで、自分の子どもを改めて見ることができたと言う人もおられます。子育て以外の所で母親や父親がゆとりを感じたり、自分自身を見つめ直し、新たな気持ちで子どもと向き合えるお手伝いが少しできたのではと思います。

21世紀、彦根の子育て支援

市長　ありがとうございました。それでは、最後になりますが、子育て中の親子に対してどのような支援が必要でしょうか。またその支援は、行政・地域・家庭など、誰が提供すると効率よく効果が発揮できるとお考えでしょうか。

田島　子どもがいる家庭だけでなく、いない家庭も、地域、職場などでも、みんなが同じ情報を共有して、子育て支援ができるような社会になってほしいと思います。そのためには、「げんげんキッズ」や「広報ひこね」、ホームページ「フレンズ」などによる情報発信がとても大事だと思います。私たちのように、子育て支援に携わる者と、行政とがいっしょになって、子育てに関する情報を積極的に発信していかなくてはなりません。

紀伊　「げんげんキッズ」を作るときも、情報の一方通行にならないように心がけています。子育てについてよりよい情報を伝えていくために、読まれた方の感想や意見をお聞きしたいし、作り手である私たちも情報の受け手の思いをしっかりと受け取ることができる仕組みを作ることが必要です。

渡辺　地域のつながりが希薄になるなど、子育てにおいて心配される要因は、都会だけではなく、彦根市内でも見られると思います。そういった中で、これから子育てをする人に、親になることの大切さを伝えていきたいです。子育て支援には、乳幼児期、児童期、思春期など、各ステージに合わせた支援が必要です。

渡辺宏子さん

　また、最近では、乳幼児期の子どもを持つ親への支援は、子育て教室など、さまざまな場所で始まっていますが、思春期の子どもを持つ親への支援はほとんどありません。こうした支援については、どのような支援が必要かといった検討も含めて今後の課題です。

杉原　海外には、親とお年寄りは大事にしましょうと教えている国もあるようです。一方、最近の日本では、勉強ができる子が一番という考え方になっているように感じます。道徳教育は、幼稚園や保育所のころから始める必要があるのではないでしょうか。ぜひ彦根から何かを始めて欲しいですね。

中村　心と体が豊かに育つ第一の基盤は地域だと思います。彦根市の子育て支援の根っこが、地域で手作りで行われているということは重要です。今のお母さんたちは、育児書を始めとするさまざまな情報に影響されがちです。一方で、両親や祖父母、地域の子育て経験者など、生きた教科書に習うことが少なくなってきました。私たちがそうであったように、現在の子育て世代にとっても、子育て経験者のアドバイスは役に立つと思います。そして、このような活動の場として、自治会館や、地域の集会所がいつでも集えるような環境が整えられればと考えています。平成16年度から、8つの地区公民館で「のびのび教室」が開催されたのはよかったです。

市長　今のお話をまとめてみますと4つに分類できます。①家庭での育児力と教育力の強化。②子育てと仕事を両立できるための支援。③安全で健全な社会環境をつくる。④子育てを支える人の広がりや関係者が連携する。このようなことになると思います。

　彦根市民の皆さん、この21世紀に、次の世代を受け継いでくれる健全な子どもたちの育成と、彼らが暮らすこの彦根市が明るく楽しいまちとなるよう共に頑張っていきましょう。

　貴重なご意見を本当に長時間ありがとうございました。